

どんな問題に悩むべきか？

What sort of problems should we worry about?

菅本 晶夫
Akio SUGAMOTO

若いとき私は長い期間深い悩みの中にあった。20代30代の頃である。

40歳のとき入院先のベッドの上で、それらは悩むべき問題ではなかったと気がついた。今は、世の中には悩むべき問題と悩むべきでない問題があると思っている。すなわち「簡単に自分が解決できそうな問題は大いに悩んでも良いが、自分の力で解決できないような難しい問題は悩むべきでない。しかしそのような問題も時の流れが自然に解決してくれる。」と私は考えている。

例えば私の本職の素粒子物理学の研究では大いに悩んで良いのである。「こんな簡単な問題も解決できない。困った！」と周りの同情を買いながら、大いに悩んで見たいのである。しかしこれらの問題は、悩むべき対象が分かった段階で、たとえ時間はかかるにしても、いずれ自分で答えを出せるような簡単な問題なのである。また最近熱中しているバイオリンとピアノの練習でも大いに悩みたいのである。「なぜ左手と右手が別々に動かない！なぜだ！」、「どうして楽譜を見てすぐに両手を鍵盤の正しい位置に移動できないんだ！」。しかしこれらも練習をして自分で解決できる簡単な問題なのである。したがって大いに悩んでよい問題である。自分が悩んでも他人に迷惑を掛けない問題だから、悩んで良いとも言えるだろう。

さて私は、昨年4月に本学の人権委員会の委員長になった。この委員会には本学で発生する難しい問題が数多く寄せられて来る。それらを解決するのが私の役割である。ほとんどは難問である。「自分の力で解決できないような難しい問題は悩むべきでない」と考えたい問題であるが、「しかしそのような問題も時の流れが自然に解決してくれる」と信じている問題でもある。解決を時の流れに自然に任せて悩まないというのは、責任者としてなにもしないということではない。自分が感情移入して悩むと、自然の流れを阻害することになり、問題を複雑にして却って他人に迷惑を掛けるからである。

したがって人権委員長としては、感情移入をせず、悩むことなく、淡々と冷静にかつ事務的に問題を処理しているのである。最近では、悩まないで時の流れに任せることが難問を解決する最良の方法であると考えるに到った。不思議なことに、問題を理解するのは難しいが、その発生原因は単純である。教員と学生、教員同士あるいは学生同士が、お互いに過度の感情移入をして、自然の流れを阻害していることが原因である。少し距離をおいて、しかし暖かい気持ちをもってお互いを眺めれば、セクハラもアカハラも起こらないのである。熱心さのあまり学生を厳しく叱責してアカハラになったり、ちょっと優しくされたのを勘違いして学生に恋愛感情を抱いたりせずに、距離を置くことである。

私は学生を川の流れに例えている。入学して流れ込んだ水が卒業して流れ出るのである。流れを乱さず、少し遠くから暖かい気持ちをもってこの川の流れる風景を楽しんでいれば、学生は自らの力で生き活きと活動するのである。決して流れを乱してはならない。

そんな訳で「大変でしょう。」と言われると「いやあ大変です。」と答えながら、毎晩酒を飲んで酔っぱらっている。(人権委員会委員長、女性支援室長)